怪談文芸研究会　二〇二五年四月二十日（日）　於オンライン

林義端『玉箒子』と三浦浄心『見聞軍抄』の関わり[一]

名古屋大学大学院人文学研究科博士研究員　森翔大

一．問題の所在

【資料一】木越治・金永昊・加藤十握編『新編浮世草子怪談集』解説（国書刊行会、二〇一六）

『玉箒子』の素材については、朴蓮淑「『玉箒木』の方法と意図」（『日語日文学研究』第四九輯、韓国日語日文学会、二〇〇四、韓国）が唯一のまとまった研究で、その他は江本・湯沢編の前掲書解説や太刀川清『牡丹灯記の系譜』（勉誠社、一九九八）に言及が見られる程度である。

▼『玉箒子』[二]については、典拠の解明や検討が求められる。

二．『玉箒子』五ノ一「兵法の極位」の典拠

【資料二】『玉箒子』五ノ一「兵法の極位」[三]

天正年中に、相州三浦三崎に、北条美濃守氏親在城なり。そのころ、戸田一刀斎と云ふ兵法者、諸国修行し、御崎へ来る。関東無双の手づかひと云ひて、諸侍弟子になり給ひぬ。面には、五ヶ八ヶ七つ太刀十二ヶ条などとて、さまざまの太刀をおしへ、その上、車の位一つを専らとおしゆるところに、弟子衆いひけるは、「この上は、陰の太刀極位を教へ給へ。」と望む。一刀斎聞て、「この車の外に奥義なし。これを肝要とつかひ給へ。奇特は工夫より顕るる者なり。右にをしへし様々の太刀は、皆方便。これ足代にて、車一刀に帰す。その上、鈍刀骨をきらず。利剣を用ゆべし。運命は天然なり。進むとも死せず。退くとも生きじ。身を捨ててこそうかぶ瀬もあれ。秘すべし。」とぞ申しける。

然るに、そのころ、三官といふ唐人、北条氏政の印判をいただき、諸越に渡り、天正六年戊寅七月二日、三浦三崎の湊へ唐舟着岸す。この舟に、十官と云ふ唐人、から国にて兵法名人の沙汰あり。諸侍所望するところに、討ち太刀なし、「面白くはあるまじけれども、ひとり兵法、つかひてみせん。白刃の長刀をもつて、広庭にてつかはん。」と

一「書物・出版と社会変容」研究会・東海近世文学会合同例会（二〇二五年七月五日開催予定）にて発表予定。

二『玉箒子』は、林義端による怪異小説集。六巻六冊、全十七話、元禄九年（一六九六）刊。

三 資料一前掲の『新編浮世草子怪談集』による。

いふ。則ち、長刀のさやをはづして出だすところ、長袖の衣装をぬぎすて、如何にもかろく、くくりばかまを着し、蛛舞などの出で立ちなり。大男にて大力、ことに、かろわざの名人なり。筋骨たくましう、眼ざしつらだましいゐ、人にかはりて見えにける。大庭に出で、長刀をつ取りて立ちたる威勢、まことの敵に出であひ、勝負を決すがごとく、眼をいからかし、歯がみし、大声をあげ、長刀を自由にふつて、うしろ前弓手妻手へ二間三間飛び、広庭にて土煙を立て、半時がほど汗水をながし、八方をさしからみ大勢のかたきを一方の角へ追い入れ、さて長刀をからりと捨てたる有様、樊噲がいかりもかくやらんと、諸侍興さめ、目をおどろかし見物せり。

皆人、沙汰し給ひけるは、「十官がただ今の振舞、かたき二百も三百もある中へ一人切つて入り、西より東へをひまくり、北より南へ追いまはし、たてざま横ざま十文字、算を乱したる手づかひ、秘術おほかりき。大長刀を自由自在にふりけるは、木刀よりもかろし。兵法の位、一刀斎にもをとるまじ。この十官と日本人、太刀討ちかなふべからず。」と皆人いひあへり。一刀斎、これを見、この沙汰を聞き、「十官に白刃の長刀を持せ、われ扇にても勝つべし。」と云ふ。皆人聞きて、「これを見物せん」と、十官をいさめすすめて、木長刀を持たせ、一刀斎は、扇を持ちて向ふところに、十官、小敵をあなどらず、をそれたる気色、老士のいさめを宗とし、張良が秘術をつくし、すさまじき有様、一刀斎もかなふべしとはみえず。一刀斎これを見、扇を捨て、両手をひろげてかかる。十官、いよいよおごらず、大事に取りて、長刀を大きにちらさず、きつさきを向ふにあててひらめかし、急にかかる時は、一刀跡へしさり、一刀手をひろげてすすめば、十官しりぞき、広庭にて追つつまくつつ、かけつかへしつ、面白さ、春の園生に蝶鳥の散りかふ花に立ちうかれ、入り乱れてあそぶがごとし。

しかるに、一刀斎飛び入つて、長刀をふみおとしければ、十官も見物衆も興をさましたり。弱よく強をせいし、柔よく剛を制すとかや。一刀斎が術知はかりがたしといへり。

▼先行研究において典拠は指摘されていない。

【資料三】『日本古典文学大事典』「三浦浄心」項（朝倉治彦筆）

（第五巻、岩波書店、一九八四）

仮名草子作者。本名は三浦五郎左衛門尉茂正。浄心は入道しての名。三五庵木算とも号した。後北条氏の遺臣。寛永二十一年（一六四四）三月十二日没、八十歳。【閲歴】浄心の経歴は詳しくは判明しないが、北条氏譜代の武士で、父は三浦五郎左衛門尉茂信と称し、北条氏政に従って鴻之台合戦など諸合戦に参加して勲功をあげ、感状を賜わった人物である。浄心は、北条氏滅亡後は、江戸に出て商人となり、晩年は天海僧正に帰依して庵住した。『巡礼物語』の記事を浄心自身の経歴と判ずれば、京都・奈良・高野・西国・奥州など諸国一見を行なっていることになる。東京浅草の浅草寺淡島堂前（戦後、二天門の脇より移動）に浄心寄進の石造手水鉢がある。ただし、銘文は慶安三年（一六

五〇）三月十二日と記されている。【著作】『北条五代記』十巻、『見聞軍抄』八巻（寛永年中刊）、『巡礼物語』三巻（寛永年中刊）、『そぞろ物語』一巻があり、この他に『猩々舞』一巻と『鳥獣憐集』一巻の二書が知られているが、所伝未詳。これらは、若年よりの見聞を記した『見聞集』三十二冊と『そぞろ物語』二十冊よりの抄出編刊である。現存の『慶長見聞集』十巻（写本）も、右二書からの抄出であろう。

【資料四】『見聞軍抄』（寛文七年（一六六七）刊）序[四]

武州江戸のかたはらに老忰の翁あり。つれ〳〵のあまりにや、見聞し事を書集たる双紙三十二冊あり。是を見聞抄と号す。され共、人にも見せず。草案のまゝ打おき、たゞをのが気味をなぐさみぬ。われ旧友なれば、彼翁が屋内に入て、此文を披見するに、当君武州へ御打入このかた、江戸繁昌を専書たり。扨又、此内にいにしへの合戦、今慶長十九歳迄のいくさを記す。予、是を拾ひ出し八冊にあつめ一部とし、見聞軍抄と名付たり。数巻よりぬき出す故、目録に前後不同あり。其言葉をちがへず写し侍る者也。

▼「見聞し事を書集たる双紙」から戦に関する話を抄出したもの。慶長十九年（一六一四）までの話を記すという。

【資料五】朝倉治彦・柏木修一編『仮名草子集成』二六　解題（東京堂出版、二〇〇四）

本書には、無刊記本と、寛文七年求板との二種がある。しかし、無刊記本には、後の加丁本がある為、一種二板となる。寛文七年求版には、改題『見聞軍書』があるので、同じく、これも一種二板となる。すなわち二種四板である。

【資料六】大澤学「三浦浄心の著作における慶長十九年」

（『近世文芸　研究と評論』三二、一九八七・六）

以上のように、浄心の著作は写本のみで伝わる①（発表者注：『慶長見聞集』を指す）を除けば、ほぼ寛永十八～十九年に集中的に刊行されたと思われる。（略）さらに、諸氏が指摘するように、本文中には明らかに慶長十九年以降の事件が記されている。（略）以上のことから、『見聞軍抄』もまた、『慶長見聞集』同様に、寛永年間の成立でありながら慶長十九年成立に見せようとしている、と考えられよう。（略）中村幸彦氏の言うごとく、『大坂物語』が「天下の権は、この合戦をもって、完全に徳川氏に帰したとの、宣伝」であるとするならば、慶長十九年の時点では、逆に徳川氏の支配はまだ完全ではなかったという認識があったことになる。浄心の書いた草稿が、この時点で成立したと主張できれば、それで浄心の責任はなくなることはないにしても、寛永中期に成立したとされるよりはすっと安全ではないか。刊本であれば著者版元の責任も問われるであ

四　八巻八冊。以下、名古屋大学附属図書館蔵本（九一三・四八／ke／岡谷文庫-八七五）による。

ろうが、編者を浄心の旧友とみせかけ、寛永版のすべての刊本に版元の記載がないのは、こちらの責任を逃がれようとするためではないだろうか。

▼寛永年間まで執筆が続けられた著作。

【資料七】『見聞軍抄』八ノ三「戸田一刀斎兵法手がらの事」

見しは昔、天正の比ほひ、相州三浦三崎に、北條美濃守氏親在城也。其比、戸田一刀斎と云兵法者、諸国修行し御崎へ来る。関東無双の手づかひと云ひて、諸侍弟子になり給ひぬ。面には、五ヶ八ヶ、七ツ太刀十二ヶ条などと云て、さま〳〵の太刀をおしへ、その上、しやの位一ツを専らとをしゆるところに、弟子衆いひけるは、「此上は、陰の太刀極位を教へ給へ。」と望む。

▼「兵法の極意」は『見聞軍抄』の丸取りである。

【資料八】中村隆嗣「『玉櫛笥』考―執筆と素材―」（『愛媛国文研究』二七、一九七七・一二）

二ノ四「和尚道歌」は、『北条五代記』九ノ一「三浦介道寸父子滅亡の事」によったと考えられる。ただ、「三浦介道寸父子滅亡の事」には、その結尾に教訓的言辞文が記されているのに対し、「和尚道歌」にはそれに相当するものが省かれている。

▼書物が身近な書肆であったために、個々の話ではなく、三浦浄心の著作に着目したか。

【資料九】柳糸堂『拾遺御伽婢子』四ノ四「夢中の闘狠」[五]

下総国藤枝村といふ所に、原幸右衛門といふ者あり。彼はもとよしあるものなりしが、さる子細あつて牢〳〵の身となつて、此所に引こもり住す。戸田一刀斎が流を酌て、兵法の達人なりしかども、態と芸をかくして独楽のたづき、皆人よきに沙汰しぬ。

※参考【資料一〇】青木鷺水『御伽百物語』五ノ二「百鬼夜行」[六]

富田無敵とかやいひて、丹後より京都にのぼり剱術の師をする人ありけり。術はもと陰流にして烏戸大権現かりに顕はれ僧慈音といひしものに伝へ給ひたりし妙手なりとぞ。是によりて、徳をしたひ業を羨て門葉につらならん事を願ひ秘受に預らん事を思ふ人もすくなからず。

五 元禄一六年（一七〇三）序。宝永八年（一七一一）刊の石川県立図書館李花亭文庫蔵本（八四〇―一〇）による。

六 小川武彦編『青木鷺水集』四（ゆまに書房、一九八五）により、適宜、句読点を付した。

▼戸田一刀斎は怪談として利用されるようになる。受容や富田流については要検討。

三、『玉箒子』五ノ三「迷悟問答」の典拠

【資料一一】「迷悟問答」あらすじ

周可長老は東国行脚の折、美濃国垂井の金蓮寺で一宿する。夜になると寺内の墓から腰から下が血まみれの除染の幽霊が現れる。幽霊と問答の末、幽霊は姿を消す。翌日、寺の僧に話を聞くと、その幽霊は春王殿・安王殿の乳母であるという。長老は、結城合戦から若君二人の斬首、乳母の拷問など、一連の物語を聞く。長老は回向をして寺を去る。

【資料一二】朴蓮淑「『玉箒木』の方法と意図」

（『日語日文学研究』四九、二〇〇四・五）[七]

（発表者注：『鎌倉殿物語』と『結城戦場物語』を比較した上で）

そして、両作品の類似は下線箇所のみではなく、引用全文に渡り、このことから『鎌倉殿物語』と『玉箒木』の差異が分かり、さらに『玉箒木』と『結城戦場物語』の類似が判明できる。なお、『玉箒木』と『結城戦場物語』の密接は本話の題名が「死霊問答　附結城戦場物語」となっていることでも伺われる。以上の諸点を考えて本稿では『玉箒木』の典拠として『結城戦場物語』を認めたわけである。

【資料一三】拙稿「林義端怪異小説の典拠」（『近世文藝』一一一、二〇二〇・一）

最後に、『玉箒子』五ノ三「迷悟問答」冒頭にある幽霊と問答する場面の典拠として、『因果物語』巻二ノ六「女の亡霊、長老と問答せし事」を指摘する。（略）幽霊との地獄に関する問答は『因果物語』収録のものとほぼ同じである。なお、本稿でとりあげた『因果物語』は万治頃刊の平仮名本であるが、片仮名本（寛文元年刊）にも同じ話が収録されている。わずかに異同があるものの、話の大筋は変わらない。平仮名本は浅井了意が編纂に関わっていたことが知られており、義端は了意とのつながりから『因果物語』を利用したとも考えられる。

【資料一四】「迷悟問答」乳母拷問の場面

乳母の女房は、奉行どもうけ取り、つよくからめて、「今度の御謀反にくみする人数はたれたれぞ。ありのままに申すべし。すこしもいつはらば拷問せん。いかにいかに」と問ひ給ふ。乳母聞て、「女の身にて候へば、何事もさらにしらず。また、若君とては、

七 KCI（Korea Citation Index）より日本語論文を参照。
（https://www.kci.go.kr/kciportal/ci/sereArticleSearch/ciSereArtiView.kci?sereArticleSearchBean.artiId=ART000931213）

ただ二人ましませしを、かやうになさせ給ふいへは、何の御　　不足ましまさん」と、たださめざめと泣きいたり。奉行ども、「さあらば、いためて問ふべし」とて、錐にて膝をもみければ、たちまち血けぶりたちて、腰より下は皆くれないに染りける。その外、七十余度の拷問は、目もあてられぬ次第なり。ややありて、乳母、「物申さん申さん」といふ。しばらく拷問をとどめければ、むざんや、乳母、声高に念仏十遍ばかりとなへて、みづから舌くひきり、かしこへこそは捨てにけれ。

【資料一五】『結城戦場物語』乳母拷問の場面八

御実検在て後、めのとの女房をも強問有べしとて、奉行が出てとふやうは、「いかに女房、今度の御むほんにくみの人数はたれ〳〵にてましますぞ。さてのこりの若君はいづくにしのびましますぞ。有のまゝに申せ。すこしもいつはりの有ならば、水火のせめにあはせべし。いかに〳〵」ととふ。めのとの女房うけ給はり、「さん候。御むほんのくみ人数は女の身にて候へば、さらにしらず候。さて若君とてはたゞ二人御座有しを、かやうになさせ給ふうへは、何の不足の御座有べき」とたゞさめ〳〵となきいたる。奉行人数是を見て、「さあらば、いそぎいためてとへ」「承る」と申て、きりにてひざをもませらる。其外七十余度のがうもんは目もあてられぬ次第なり。

【資料一六】資料一一前掲、朴蓮淑「『玉箒木』の方法と意図」

内容の簡略化は前に引用した姥の悲劇を取り上げる場面を除いて全体に渡っていて、それによって永享の乱・結城合戦をめぐる歴史的事件の顛末を大まかに掴むことができる。要するに『玉箒木』は『結城戦場物語』の簡略化を通してその歴史を自作に移そうとするものと見られる。

一方、『玉帚木』は、原拠の抒情性の豊かな乳母の悲劇を叙述するくだりは長い文章を憚らずその大部を借用するという手法を見せる。この乳母の悲劇の部分が作者義端の最も視点を置いた箇所であることは前に述べたとおりである。結論を先に言うと、『玉箒木』の意図は原話の若君らの悲劇に向く視点を乳母の悲劇に移し、その受容で若君らに忠節と愛情を尽くす乳母を描出することである。

▼先行研究から類似は認められる。

【資料一七】「迷悟問答」結城七郎、女性の助命を請う

「七郎をはじめ、一門がその中に老たる母と、おさなきむすめ数多持ちたり。かれらが死せんことこそふびんなれ。わづか二十人の内外なり。たすけ給うべきならば、城内を出さん」

八　内閣文庫蔵本を底本とした「結城戦場物語」（『古典文庫』四二一、一九八一）により、適宜、濁点や鉤括弧を付した。

【資料一八】『結城戦場物語』結城七郎、女性の助命を請う

「我等かくわいふん是までなり。今はしかいを仕らむと存が、城の内に女共十四人有。かいせん事もむざんなり。なさけをもつておとし申さば、今世後世わすれがたき御ほうしたるべし」

【資料一九】『見聞軍抄』七ノ四「結城落城の事」結城七郎、女性の助命を請う

「七郎をはじめ一門が其中に老たる母とおさなきむすめ数多持たり。かれらが死せん事こそふびんなれ。わづか廿人の内外也。たすけ給ふべきならば、城内を出さん」

【資料二〇】「迷悟問答」春王丸・安王丸の歌

青野が原にかからせ給ふところに、京よりの飛脚、けいごの武士に行き向ひ、「両若君の御ことは、首にて京着あるべし」との宣旨のよしを申す。御兄弟は聞し召し、「何事ぞや」ととひ給ふ。二人のめのと、「これはただ御よろこびの御使」とぞこたへける。春王殿、

よろこびの世にあふみとはなりもせで青野が原の露と消えまし

とよみ給へば、安王殿

あひ川やすそをひたして行くそでに垂井の露と消えやはてなん

と詠じ給ふのいたはしさよ。御輿をこの垂井金蓮寺の道場へ入れ奉る。

【資料二一】『結城戦場物語』春王丸・安王丸の歌

青野が原に着給ふ。かゝりける所に京より飛脚二人到来して、春王殿御兄弟を道にて誅申、首取京着有べき由、芳意の旨をけいごの武士にさゝやきける。春王殿御覧じて、なにとやと猶もあやしく覚しめし、いかに安王殿心得たまへといはまほしくはおもへども、よしいとけなき心にて、みれんのことをもいはれてはあしかりなんとおぼしめし、一首の哥にかくばかり、

なつ山や青野が原にさくはなの身のゆくゑこそきかまほしけれ

安王殿とりあへづ、

身のゆくゑさだめなければたびのそら命も今日にかぎるとおもへば

と詠じたまへば、春王殿さてははや安王も心得たりと思召、

【資料二二】『見聞軍抄』七ノ四「結城落城の事」春王丸・安王丸の歌

青野が原にかゝらせ給ふ所に、京よりの飛脚けいごの武士に行向ひ、両若君の御事は、首にて京着有べしとの宣旨のよしを申。御兄弟は聞召、何事ぞやとゝひ給ふ。二人のめのと、是はたゞ御よろこびの御使とぞこたへける。春王殿、

よろこびの世にあふみとは成もせで青野が原の露と消まし

とよみ給へば、安王殿、

○あひ川やすそをひたして行袖にたる井の露と消やはてなん
と詠じ給ふのいたはしさよ。御輿を垂井の金蓮寺の道場へ入奉りる。

▼歌の類似など、本文は『見聞軍抄』に近い。

【資料二三】『見聞軍抄』七ノ四「結城落城の事」春王丸・安王丸の歌

二人のめのと、「此中路地の御つかれ、御しんならせ給へ」と申ければ、しばし御しん有けるを、御そばへ立寄、三刀づゝ害し奉る。春王殿十三歳、安王殿十一歳。おなじき年の秋、あだし野の露と消させ給ふ。御最後の御有様、筆にも尽すべからず。

▼『見聞軍抄』を本筋として、その後の女房の拷問場面を『結城戦場物語』から引用し、物語をつなげた。

▼道中で春王丸が安王丸に聞かせる伝承、金蓮寺での上人との対面など、いくつかの展開が挿入されている。「合戦描写の華やかさと、後半の持氏・憲実に対する批判文に作者の力説が印象的に設定されているため、武士階級における忠君の心得を主題とした観が強い。」（林祝子「『結城戦場物語』の作者について―時衆藤沢十七代暉幽上人の存在―」（『中世文学』二五、一九八〇・一二）という指摘もある。結城合戦を語るには『見聞軍抄』が利用しやすかったか。

▼仏教的な要素の排除か。

四．まとめ

『玉箒子』の「兵法の極位」「迷悟問答」は『見聞軍抄』としていた。義端は三浦浄心の著作全体に目を通した上で、話を組み合わせて物語を構成していた。

※論の構成の方針について

【資料二四】大澤学「三浦浄心の著作と『吾妻鏡』」（『国文学研究』九六、一九八八）

浄心はなぜ『吾妻鏡』を多用したのであろうか。浄心が関心を持つ東国の戦乱は『源平盛衰記』などに記事が少ないこと、『北条五代記』巻九ノ二前引部分で「誰か是を信用せざるべき」と言っているように、史書としての信頼性が当時の書としては非常に高いことが、まず理由として挙げられよう。『見聞軍抄』巻五ノ五で佐藤次信・忠信の父について、及び能登守教経について、また巻六ノ三で熊谷直実についての史実が問題とされるとき、いずれも『吾妻鏡』を実とし、『平家』・『盛衰記』・幸若舞を虚としているこ

とからも、浄心の『吾妻鏡』への信頼がうかがえる。『見聞軍抄』の頼朝挙兵から泰衡追悼に至るまで、五章にわたる長大な『吾妻鏡』引用は、『平家』『盛衰記』等の記述の欠落・不足をかな書きにより補おうとするものではなかったか。

「兵法の極位」…「鈍刀骨をきらず。利剣を用ゆべし。運命は天然なり。進むとも死せず。退くとも生きじ。身を捨ててこそうかぶ瀬もあれ。秘すべし。」
「鈍刀骨をきらず」→甲陽軍鑑
「運命は天然」→義貞軍記

「兵法の極位」…「皆人、沙汰し給ひけるは、「十官がただ今の振舞、かたき二百も三百もある中へ一人切つて入り、西より東へをひまくり、北より南へ追いまはし、たてざま横ざま十文字、算を乱したる手づかひ、秘術おほかりき。大長刀を自由自在にふりけるは、木刀よりもかろし。兵法の位、一刀斎にもをとるまじ。この十官と日本人、太刀討ちかなふべからず。」

其勢決然として恰樊噲・項羽が忿れる形にも過たり。　太平記七・八・二十八
「縦ざま横ざま蜘蛛手十文字に懸破て、後へつと出たれば」→平家物語「木曽の最期」
「勇にも過たりければ、大勢の中へ懸入、十文字に懸破、巴の字に追廻らす」→『太平記』

四

「兵法の極位」…「十官しりぞき、広庭にて追つつまくつつ、かけつかへしつ、面白さ、春の園生に蝶鳥の散りかふ花に立ちうかれ、入り乱れてあそぶがごとし」
→謡曲や牛若丸と弁慶のような戦闘場面の創出

☆三浦浄心の方法にも言及し、仮名草子・軍記から浮世草子怪談への受容と変遷を論じる。